

中国遼西古回廊文化観光開発へのアプローチ

——北東アジア地域協力の視点から——

李

剛^{*1}・黄

朕^{*2}

論文要旨：

そもそも北東アジアは一つの地域的、地理的な概念であり、中国（主に東北三省、華北地区の東部と東北部、内モンゴルの東部と東北部）、日本、韓国、北朝鮮、モンゴル、ロシア（東シベリアと極東地区）からなっている。地域の位置から見れば、中国の東北部は北東アジアの中心的位置にあるため、そこをコアに、歴史的に幾つかの民族回廊とシルクロードができた。これらの豊かな観光資源は鮮明な多様性と民族性を持っており、文化観光開発の独特なキャリアである。

本論では、北東アジア地域観光協力の視点から、遼西古回廊に焦点をあて、異なるモチーフとテーマの観光コースをプランしたうえ、既存の政策を活かし、文化観光としてのありかた、アイデンティティの確立、地域経済開発のバランスと安定的な発展を実現することを目指す。

キーワード：北東アジア地域・遼西古回廊・文化観光開発・異文化交流・発展ビジョン

一、はじめに

一つの国家は文化の自信が教育から来ており、文化の他信が観光に頼る。その中、観光は文化伝播の重要な経路でもあれば、人類文明の重要なキャリアでもある。「観光＝旅行＋遊覧」という定式から言えば、観光の先決条件は旅行であるが、旅行に行くなら交通なくしてはできないため、交通機関が進歩するごとに観光の飛躍的發展につながった。例えば、蒸気機関車などの交通機関の発明により観光は古代から近代へ変わりつつあり、観光業にも次第に現れていった。また、飛行機の民営化に伴い観光業は質的な飛躍がもたらされていった。一方、文化と観光は交通とあいまって三者の結びつきが典型的な共生関係であり、文化、観光交流の重要な道としての交通回廊は現代文明をもたらしただけでなく、更に観光業の発展を支えてきており、遼西古回廊はまさにこのような交通回廊の一つと言えよう。

遼西古回廊とは燕山の北部にあり、西拉沐淪河の南側、下遼河の西側、七老図山脈の東地域にある東北－西南方向の河谷の天然の交通回廊を指す。地理的な交通回廊だけでなく、文化を広げる「詩書の道」でもあると言われている。

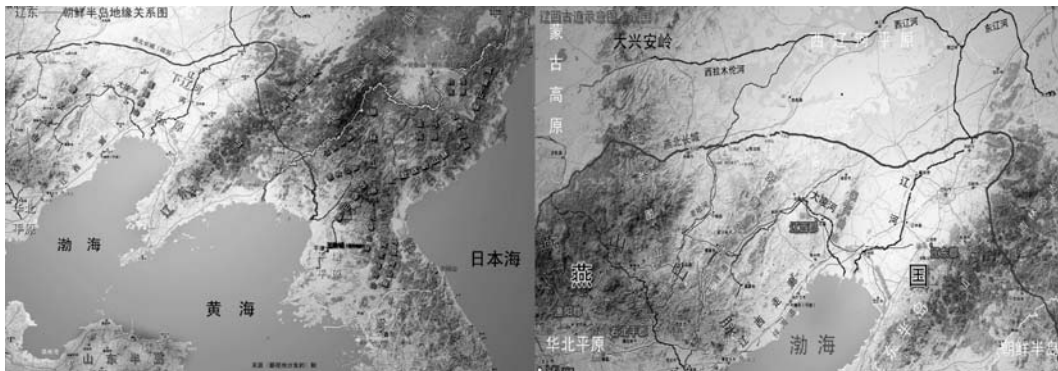
※本論文は2013年度中国国家社会科学基金プロジェクト「観光目的地における周期的進化とガバナンスメカニズムに関する研究」（プロジェクトコード：13 BGL 089）、2015年度天津市哲学社会科学研究規程基金プロジェクト「京津冀地域における観光協力持続可能な発展のための保障メカニズムに関する研究」（プロジェクトコード：TJYY 15-009）の研究結果の一部である。

*1 李剛（1964年6月～）、男性、中国天津市出身、天津財経大学商学院観光学部、准教授、修士課程の指導教官。博士・修士（地域経済政策学）、修士（言語文化学）。主な研究分野：地域経済政策学、観光経済学、観光心理学、言語文化学。2008年5月より大阪観光大学観光学研究所客員研究員。

*2 黄朕（1991年7月～）、女性、中国天津市出身、天津財経大学大学院観光管理専攻修士課程2年生。

遼西古回廊は漢、モンゴル、山戎、東胡、烏桓、鮮卑、契丹、女真、高句麗などの民族文化を伝承しており、中原、モンゴル高原、東北地区を疎通させたうえ、中華民族と中華文化の多次元の構造を促成させた。社会組織形態の発展、中心邑落（都市）の形成と進化及び発展、壇・塚・廟を組み合わせた祭祀及び崇祖尊王（先祖を崇め、王様を尊ぶ）の礼制、文字の発明、青銅器の鑄造、仏教の盛衰などの文化内包を包含して、中華文明の発源地の一つであり、典型的な地域-民族-文化の回廊である^①。遼西古回廊へのアプローチはかなり重要視されており、地域、民族、文化など要素全体を遼西古回廊の観光開発に取り入れる研究も注目されている。

図1 遼西古回廊の見取り図



出典：互動百科. 明朝遼西走廊（回廊）[EB/OL]. <http://www.baike.com/wiki/> より

二、遼西古回廊のルーツとして

遼西古回廊は古くから存在しており、海沿いのルートだけでなく、中原と東北を繋ぐ幾つかの古代交通ルートの総称である。中原地域から東北地域にかけ、一般的には燕山の関所を抜け、青竜河沿いに北上し、大凌河流域にある重鎮-平剛に注ぎ更に北上し、老哈河に沿い、赤峰に至る。大凌河東北に沿い、医巫閭山を越え、遼東に至り、その後東北内陸へと北上する。遼西古回廊は新石器時代の紅山文化時期から原型が現れつつあった。現在の考古集落遺跡から見ると、老哈河、大凌河、小凌河などの流域に沿い、努魯爾虎山、松嶺、医巫閭山などの山間を曲がりくねり、線状のように広がっている。漢魏時代以後、中原から東北にかけ、陸海における四本の古回廊が徐々に現れ、その内の三本は陸路にあり、遼金時代以前に重要な役割を果たしてきた^②。

一つは、平剛古道であり、古北口（現在の北京密雲）から平岡（現在の河北省承德付近）へ、更に柳城（現在の朝陽市）へと、このルートは最も牛河梁紅山文化同期である。

もう一つは芦龍古道であり、東周時代に開通された。北京から芦龍塞を経た後、滦河谷地沿いに白檀城（現在の河北省滦平）へと北上し、東へ平岡を曲がり、七老図山麓に沿い、白狼水谷に入り、更に柳城、昌黎に至る。

三つ目は無終古道であり、燕都薊（現在の北京付近）から出発し、無終（現在の天津薊県）を経て、滦河下流沖積平原に入り、榆関（現在の山海関）を出て、碣石に至り、北へ松嶺を越え、白狼水谷に入った後に下り、柳城を抜け、昌黎に至り、南へと折り返し、医巫閭山麓の東部を経て遼東に入る。これは秦漢時期に開通されたものである。

四つ目は、海沿いの古道であり、楡関から渤海湾沿いに東へ錦州に至り、大凌河を渡り、医巫閭山麓の南部を抜け、遼河に至り、遼東の各地へ行くことができる。このルートの発見は早く2000年前からであり、遼金時代に開発された後、重要視されつつあり、明清時期になった後は中原から東北への重要な要衝の地とルートになってきた^③。

遼西古回廊は主に遼寧省の朝陽、阜新、葫蘆島、錦州、盤錦という五つの市を含むほかに、内モンゴルの東部にある赤峰市、天津の薊県、河北省東北部の承德市、秦皇島市なども含まれる。

本論では現行の行政区画を踏まえたうえ、研究資料の収集の便利さを図るため、遼西五都市を遼西古回廊とする。

三、遼西古回廊観光開発として

遼西古回廊の独特な豊かな自然景観は品位が高いものである。例えば、朝陽には世界最大の古生物化石宝庫を持っている。錦州には潮汐に伴い、一日二回も現れる珍しい奇観－筆架山天橋がある。盤錦には最もよく保存されている芦群落と葦海鶴郷紅浜辺の砂浜などがあり、「北国の湿地の都」と呼ばれている。阜新では「粉砂で築かれた、崩れないダム」、「長らくの旱魃ながらも旱魃せず、長らくの冠水ながらも水害にならず」に因んだ大青溝が奇妙を思わせる。山、海、島、温泉を備えた葫蘆島は、綺麗な自然資源に恵まれている。

中華文明発祥地の一つである遼西古回廊は人文景観がバラエティーに富んでいる。葫蘆島の綏中には秦の始皇帝により建てられた大規模な秦漢石宮遺跡があるほか、中国における唯一の水上長城（長さ1704メートル、世界文化遺産）－九門口長城、最もよく保存されている古戦場、明代四大古城の一つである興城古城もある。阜新には新石器時代の「中華第一村」と呼ばれる査海遺跡、「東蔵」と讃えられた海棠山、瑞応寺などがある。三燕古都と呼ばれる朝陽には、千年も前から残った東北第一古塔－朝陽北塔、中華文明史をリライトし（書き替え）、原始文明の曙光を現した牛河梁紅山文化遺跡がある。錦州には中国古代五鎮山の一つである北鎮医巫閭山及び民俗文化があるほか、最北部にある石窟建築群－万佛堂石窟及び中国古代建築における最大の単体木造建築－遼代奉国寺もある。

「詩書の道」としての遼西古回廊は、多種多様な文化を集めており、細長い交通回廊は軍隊が奪い合う戦略上の要地であり、悠久な戦争文化が蓄積されてきた。中原と東北との過渡地帯に位置するため、地域も民族も時期もそれぞれ異なった文化が重なり合っている。例えば、碣石遺跡では秦漢時期の宮廷文化が示され、万佛堂石窟では北魏時期の鮮卑文化と仏教文化が代表され、奉国寺では古建築文化、仏教文化と契丹遼文化を融合させた。朝陽南北二塔、崇興寺双塔などは遼代の仏教建築文化を代表し、瑞応寺と海棠山の崖に刻んだ文字や仏像は明清時期のモンゴル族のチベット仏教文化及び清代満州族の文化と情緒満州族の切り紙、刺繍は満州族の民俗、芸術などの民族文化が含まれている。また、遼西の秧を代表した。興城と前所古城では明清両時代の盛衰存亡、榮譽及び恥辱が見られる。医巫閭山の歌（田植え踊り）、人形劇、黒山「二人転」（中国の黒龍江、吉林、遼寧省一帯で行なわれている民間芸能の一種、伴奏に合わせ二人が交替で歌い踊る）、東北太鼓、義県社火（祭りの時、民間で行なわれる獅子舞や龍灯舞いなどの演芸）は中国の関東民俗文化を伝えてくれる。

遼西古回廊地域では自然景観と人文景観とは相まって照り映えており、物質と非物質（有形

文化財と無形文化財)の民族文化が数多く残っている。

そのため、本論では観光開発の潜在力のある資源を下記の表1にまとめてみた。

表1 遼西古回廊における観光資源の一覧表

観光資源 観光コース	主な観光資源
<p>錦州 紅色観光資源 (レッドツーリズム)、遼文化、民俗等</p>	<p>万国博覧会公園、医巫閭山、九華山温泉、大凌河、小凌河、女兒河、松山生態園、吳楚莊園、廉政蘋果園、東湖公園、北湖公園、北鎮廟、万佛堂石窟、奉国寺、筆架山及び天橋、遼沈戦役記念館、大広濟寺及び遼塔、錦州市博物館、崇興寺双塔、北鎮鼓楼、李成梁石坊、北普陀山及び采桑節(桑取祭り)、二郎洞、龍岡墓群、青岩寺、黒山天主堂、翠岩山、義県八塔山、義県化石館、道光二十五貢酒工芸、溝帮子燻鶏(燻製鳥)工芸、錦州小菜(惣菜)、烧烤(ロースト肉)工芸、医巫閭山満州族剪纸(切り紙細工)、民間刺繍、民間遺風など、黒山二人転、皮影(影絵芝居)、遼西高跷(祭りで行なわれる民間芸能の一つ、竹馬のような高足を履いて踊り歩く)、秧歌(田植え踊り)、人形劇、西城派東北太鼓、義県社火、伝統的な錫彫刻、黒山の伝統的な泥人形、海洋音楽会、国際民間音楽祭、医巫閭山花見大会、北鎮農業観光地区、義県伏羊節(三伏とは、一年中で最も暑い時期である。真夏の時期になると、旧暦の節気で推算し、「初伏」とは夏至後3番目の庚の日から10日間を、「中伏」とは夏至後4番目の庚の日から10日間または20日間を、「末伏」とは立秋後初めの庚の日から10日間を言う。「伏羊節」とは、この「初伏」に入ってから約1ヶ月間、羊肉を食べたり、羊肉のスープを飲んだりすることである)など</p>
<p>阜新 黒色観光資源(ブラックツーリズム)、チベット仏教黄色観光(イエローツーリズム)資源、民俗など</p>	<p>海棠山及び紅石溪、天水谷温泉、瑞応寺、査海遺跡、普安寺、千佛山、懿州古塔、海州露天国家鉱山公園、大青溝、章古台国家砂地森林公園及び自然保護区、巨龍湖、聖経寺、那木斯萊自然保護区、関山、東郊湖、宝力根寺、塔子溝、三塔溝、高山子風電観光地区、海州廟法会、烏蘭木図山、万人坑、瑪瑙彫刻、モンゴル族情緒、三溝酒、紅袍杏、モンゴル餡餅(餡子入り餅)、喇嘛炖肉(豚肉の煮込み)、東モンゴル短調民謡、モンゴル族烏力格爾(ウリゲルとは講談を語る。寄席演芸の一つ)、モンゴル勅津婚礼、勅津安代(モンゴル語、歌と踊りを取り入れる総合的な芸術であり、すでに300年余りの歴史がある。「安代」とは、モンゴル語の音訳で、頭と身を上げる意味である。安代踊りは原生体舞踊であり、モンゴル族舞踊の化石とされている)、勅津好来宝(モンゴル族の演芸の一つ、無伴奏で語りや歌からなる演芸)、胡爾沁説書(講談を語る)、勅津モンゴル医薬、勅津祭敖包(もとモンゴル語、路傍に石や土を積み上げたもので、本来は道標や境界石であったが、やがて神霊の宿る場所とし、祭祀の対象となった)、勅津馬頭琴音楽、勅津刺繍、彰武民間剪纸(切り紙細工)、朝陽紅土泥人形、朱月嵐剪纸(切り紙細工)など</p>
<p>朝陽 「三古四燕」文化古跡など紫色観光資源(パープルツーリズム)、民俗など</p>	<p>鳳凰山、努魯爾虎山自然保護区、桃花山風景区、牛河梁遺跡、鸽子洞遺跡、南北二塔、烏化石国家地質公園、槐樹洞、東山嘴遺跡、燕長城遺跡、袁台子墓、馮素弗墓、雲接寺塔、佑順寺、喀喇沁モンゴル右翼王陵、天成觀、万祥寺、清風嶺、関帝廟、千仏洞、塔城牌黒酢、喀左紫砂陶器、切糕(もち米の粉を蒸して作ったもち、ナツメやあんこをまぜる)、碗砣(そば粉で作った軽食)、凌源影絵芝居、喀左東モンゴル民間故事、北票民間文学、朝陽民間秧歌(田植え踊り)、建平剪纸(切り紙細工)、建平十王会、天成觀廟会、遼西古戰場伝説、哨口高跷(祭りで行なわれる民間芸能の一つ、竹馬のような高足を履いて踊り歩く)、喀左皮影(影絵芝居)など</p>
<p>葫芦島 泉、海、城、芦島など藍色観光資源(ブルーツーリズム)</p>	<p>温泉、興城古城、九門口長城、西溝長城、碣石宮、姜女石遺跡、菊花島、祖氏石坊、文廟、首山、葫芦山莊、葫芦島軍港、中前所城、止錨湾海浜、龍湾海浜、飛天広場、鑫龍湾生態園、烏金塘ダム、塔子溝双塔、龍潭大峡谷、虹螺山、白狼山自然保護区、蓮花山聖水寺、靈山寺、前所城、朱梅墓園、人文記念公園、塔山狙撃戦記念塔、永安長城、小河口長城、皓家住宅、周家住宅、薊遼督師府、三磯攬勝、張作霖別荘、太平太鼓、興城満州族秧歌(田植え踊り)、建昌鼓楽(太鼓の入った音楽)、大鼓(三弦の伴奏に合わせ、演者が拍子木や小太鼓を叩きながら、台詞を交え、物語を語る演芸の一種)、灯籠祭りなど民俗</p>

<p>盤錦 湿地、生態商品など 緑色観光資源 (グリーンツーリズム)</p>	<p>双台河口自然保護区葦海鶴郷紅海灘、遼河碑林、遼河文化産業団地、湿地塩生灘塗 植被と珍しい鳥、有機稲米、張氏祖居祖墓、甲午古戦場、南大荒農場、遼河油井塔 林、湖濱、中興公園、馬術クラブ、鼎翔生態観光区、西安現代農業団地、国際湿地 観光祭り鑫安源レジャーランド、太平河風光地帯、河蟹文蛤（カニとアサリ）等湿 地水産品、月牙湾湿地公園、蛤蜊崗、甲午戦争殉国将士墓、緑水湾、田荘台関帝 廟、中尧七彩莊園、上口子農業観光エリア、1948 ハッピー農場、花卉博覧園、緑 水岸レジャー・リゾート回廊、農業開拓栄興記念館、鴛鴦溝観光エリア、東晟園芸 基地、饶陽湾景勝地、華原緑緹葡萄園ワイナリー、米博物館、古魚雁故事、民間蠟 燭製作工芸、上口子高跷（祭りで行なわれる民間芸能の一つ、竹馬のような高足を 履いて踊り歩く）と秧歌（田植え踊り）など</p>
--	--

出典：筆者が呂俊芳、李悦錚. 遼寧旅遊資源整合開発研究 [J]. 遼寧師範大学学報（自然科学版）, 2014(1) : 123-128 に基づいて加筆して作成した。

四、遼西古回廊文化観光の「三位一体」の開発モデルとして

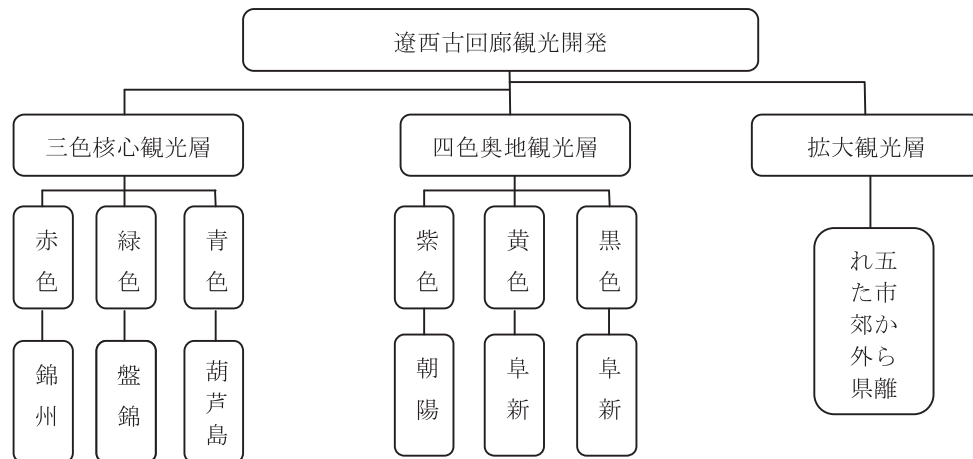
遼西古回廊は観光資源の組み合わせの特徴が良く、資源はほぼ遼西における重要都市である錦州周辺に集中し、数十平方キロ以内の距離に位置し、それぞれ特色があり、補完しあっている。葫蘆島市は海浜観光資源をメインとし、更に山、島、城などと相まって、ブルーツーリズムプレートになる。錦州市ではレッドツーリズムプレートをメインとする。盤錦市では葦海鶴郷紅海灘などの観光資源を頼りにグリーンツーリズムプレートをメインとする。朝陽市では「三燕古都」と歴史文物の集まるパープル（バイオレット）ツーリズムプレートをメインとする。阜新市ではチベット仏教で有名なイエロツーリズムプレートと、石炭採掘のブラックツーリズムプレートをクローズアップする^④。遼西古回廊地域におけるこれらの六大ツーリズムプレートの観光商品は種類が豊かであるうえ、地域空間上では積み重なり、観光機能上では補い合い、多角的に観光客のニーズに応えられる。

本論では上記の内容を踏まえ、次のように論述し、アプローチしてみたい。

1. 観光資源の潜在力を掘り起こし、「五顔六色」（「色とりどり」、「多種多様」）な文化創意のある観光ブランドを作り、「三位一体」モデルにおける前位的なものにする。

「五顔」とは、色彩で遼西古回廊地域における葫蘆島、錦州、盤錦、朝陽、阜新という五大プレートを指す。「六色」とは具体的に葫蘆島の藍色文化（ブルーカルチャー）、錦州の紅色文化（レッドカルチャー）、盤錦の緑色文化（グリーンカルチャー）、朝陽の紫色文化（パープル〈バイオレット〉カルチャー）、阜新的チベット仏教の黄色文化（イエロカルチャー）と工業石炭採掘の黒色文化（ブラックカルチャー）などの色彩を指す。実践的には、色彩を盛り上げた観光は、生産と消費との同時性且つ無形性のサービス型の観光商品に物理的な特徴をつけ、消費者に実物商品のような強烈かつ強力な視覚的インパクトを与え、市場が観光商品に対し、消費認知を強化した^⑤。遼西古回廊の「五顔」は地域空間上で集まり、「六色」は文化機能上で補い合い、「五顔六色」らしき創意のある観光ブランドを作り上げた。即ち、「レッド錦州」、「グリーン盤錦」、「ブルー葫蘆島」という「三色核心観光層」ができた^⑥。それに「パープル〈バイオレット〉朝陽」、「イエロ・ブラック阜新」という二色奥地観光層を加え、また「五顔」から少し離れた郊外の「六色」を付け加えると、「五顔六色」のような文化的な創意のある観光ブランドができた。要するに文化創意で核心的な観光ブランドを作る。（図2のように示す）

図2 遼西古回廊における「五顔六色」観光創意ブランドの見取り図



出典 筆者が本論の研究内容を踏まえて作成したものである。

2. 「1・2・3」文化創意で観光消費を率い、遼西古回廊観光の新たな成長点を育成し、「三位一体」モデルにおける中位的なものにする。

遼西古回廊の人類曙光－紅山文化、蓄積の深い戦争文化、農業牧業交錯の鮮卑三燕文化、契丹遼文化、モンゴル族文化、満州族情緒清風文化、ワイルドな「二人転」、田植え踊り、契丹竹馬、早船舞い（民間芸能「跑早船」で使う、船の形をした舞台道具）など無形文化財遺産民俗文化に対し革新的な組み合わせを行ない、一つの総合的な（五顔六色）文化創意観光産業パークを建て、二つの文化創意観光基地（伝統的な手工業観光商品製造基地、化石骨董品文化基地）の成立を促し、三つの特色のある観光文化産業地帯（鳳凰山－海棠山－医巫閭山など山岳宗教文化産業地帯、遼西古回廊軍事観光文化産業地帯、鮮卑・契丹・満州族・モンゴル族遊牧民俗観光文化産業地帯）づくりに取り組み、「1・2・3」という創意のある観光項目により、観光商品の静態と単調さを変え、消費者の消費意欲を引き付け、観光消費の新流行を率い、観光産業の新たな成長点を培う^⑦。

3. 文化創意で観光の経営販売を強化し、遼西古回廊における観光産業構造の向上を促し、「三位一体」モデルにおける後位的なものにする。

自然資源と同様に、独特な民族文化資源も開発利用でき、経済利益に転換することができる^⑧。遼西古回廊では、地域の民族文化資源の統合開発に取り組み、ドキュメンタリー映画の製作などにより核心的文化観光ブランドが育成され、銘柄を頼りに、創意的な経営販売を通し市場へ売り出し、経営販売をシステムエンジニアリングと見なす。経営販売の方向、主体、タイミング、頻度、手段及びブルートなどにおいて完備な方案を醸し、常に使用できる状態にすべきである。文化創意で観光の経営販売を強化し、商品の競争優位を構築し、体験の思惟で観光商品を作り、観光経営販売のキャリアと突破口を正しく選択し、発散的な思惟で経営販売の組み合わせを行ない、ブランドへのターゲットマーケットカスタマーズのロイヤルティー（忠誠度）を作り、弾力的な思惟で経営販売のストラテジーを生かし、文化創意のある経営販売を通じ古回廊の文化創意産業を向上させ、その構造（メカニズム）を最適化させる。

五、おわりに

文化観光大開発の背景のもと、遼西古回廊に対する新たな見直しは異なる分野、科学、文化の学際的な視点にあり、多様な資源を整合、又は交えあい、文化的、創造的な観光ブランドを醸し出し、「三位一体」の文化創意観光モデルを構築し、遼西古回廊の「メディチ効果」を作り出す。また東北アジア地域協力の視点から観光文化交流により協力開発に取り組むべきである。多元的な文化の衝突と交流は地域経済の特徴と発展の原動力である。北東アジア地域の経済一体化発展を推し進める過程においては、文化交流の紐帯役割を果たすことが非常に重要である。

本論では北東アジア地域関係諸国間における交流協力、文化観光開発及び発展を促進するために更に下記のように考える。

1. 北東アジア地域各国文化交流強化の積極的な意義

歴史経験から見れば、文化と文化産業は経済活性回復の促進においては重要な役割を果たす。そのため、北東アジア文化の類似性の優勢を生かし、文化交流と協力及び提携を強化しなければならない。また、各国間の文化観光開発を促進することは積極的な意味合いを持っている。

そのため、文化交流は各国の投資家がホスト国の人文環境に対する更なる理解に資するところがあるとともに、投資先の国の良いイメージを確立し、資金投入の安全性を向上させる。投資家と投資対象国の文化親和力が投資成功の主な原因の一つであると言える。また文化交流により、ある程度、各国間の経済協力が推し進められる。その中で、観光文化交流により多数の観光客が行き来している。例えば日本は観光業発展を更に拡大し、中国人観光客を引き寄せるため、中国の「銀聯卡」(チャイナユニオンペイクレジットカード)の日本国内での利用地を増やしている。

北東アジア地域開発にあたり、文化交流は非常に重要である。それぞれ異なる各国の文化伝統は文化交流、観光旅行などを通じ、互いに理解し合い、経済交流協力のための良い環境にもなる。例えば、日本の新潟市ではここ数年「日本酒」と「美味しい料理」をセールスポイントに、数多くの文化観光交流イベントを催し、中国、韓国、ロシアなど東北アジア諸国(地域)からの観光客に喜ばれている。

2. 北東アジア文化交流の可能性分析

地縁的、経済的な要因などの多重な影響により、北東アジア文化の更なる交流強化は実行可能である。

第一、北東アジア地域の多国間の文化は類似性と包容性を持っている。この地域は地縁が近く、文脈が通じ合い、共通の歴史と文化記憶がある。とりわけ、中国、日本、韓国などの国は数多くの文化的なルーツと根源があり、伝統的な文化や祭りも共通するものがある。ロシアは「欧亜大陸橋文化(ユーラシア・ランドブリッジ)」として東方文化(オリентカルチャー)との融合性も明らかである。これは、経済と文化面において密接な関係のある中国東北地域とロシア極東地域では更に目立っている。ロシアの加わりは鮮明的な文化個性により、地域文化

内包の包容と外延の拡大を促し、東北アジア地域協力に更なる開発空間を与えようとしている。

第二、観光交流は国境がなく、経済を発展させることがコンセンサスである。グローバル経済の安定的な回復の背景のもと、北東アジア地域関係国では観光業は国民消費の促進、経済成長の向上、開発方式の転換、雇用拡大、貧困撲滅などにおいて特殊な産業優位性をもつことが認められ、観光客招致のために効果的な政策をつぎつぎと打ち出している。

日本の場合、世界的な金融危機の影響で、経済の不景気が続いており、海外からの需給が足りず、円安による工業製品の輸出への悪影響が出たため、観光業などその他の産業で良性的に牽引することが必要となる。ここ数年、中国人（大陸部）の訪日観光客がかなりの勢いで増加しており、日本国内での消費能力が米国と EU 諸国を上回った。中国人観光客からの巨大な経済利益と無限大な潜在力を意識した日本政府は、2010年7月1日から中国人（大陸部）観光客の訪日査証の発行制限を緩和し、個人観光客の訪日査証対象を富裕階層（年収25万元以上＝約500万円以上）から中産収入階層（年収6万円＝約120万円）に拡大した⁹⁾。

一方、更に多数の中国人観光客を引き寄せるため、韓国政府は、中国人観光客に向け、マルチビザの発行範囲と対象の拡大を実施した。北朝鮮、モンゴル、ロシアでは中国人団体観光客の条件付の無査証入国を認めている。

3. 北東アジア文化交流の多元的な開発と発展

地域経済一体化の発展は共通の文化根源、相互信頼、共通認識の地域文化によって支えられる。ところが、歴史上の政治不信、体制差異、歴史問題の葛藤などによる北東アジア地域関係諸国の文化認識の差異性が更なる協力と提携に影響を与えかねない。

本論では、北東アジア地域の多元的な文化発展戦略を踏まえ、共同で特色のある地域観光文化づくりに取り組むため、下記を提案する¹⁰⁾。

第一、北東アジア地域関係諸国の観光仲介機構と非政府組織（NGO）の役割を強化し、自国民の周辺諸国への観光を勧奨し、国境を跨ぐ観光協力（クロスボーダーの観光協力）を推し進め、各国の観光業への投資を促進し、共同で地域の観光資源を開発する。現在、環日本海各都市では、類似性のある文化資源と民族特色を頼りに、共同で国境を跨ぐ観光コースを開発し、観光施設の完備、観光査証手続の簡素化、バリアフリーの観光システムを作り、環日本海の観光ブランドづくりに取り組んでいる。これは大変有意義だと考える。

第二、若者世帯のスポーツ文化交流を推し進める。1993年より中日韓三国のスポーツ協会は毎年1回、順番に三国青少年スポーツ大会を共催し、一国からの参加者は200人とし、18歳未満の青少年選手を指定する。このスポーツ交流大会は中日韓三国の青少年のスポーツ交流に有意義なプラットフォームを提供している。

第三、各国の歴史文化伝統の伝承を前提とし、各国ではそれぞれ工芸品と書画芸術品展示会を催し、文化観光を行ない、技術協力を実施する。例えば、東北アジア投資貿易博覧会では北東アジア文化芸術週間、第二回北東アジア国際書画撮影展示会及びロシアロイヤル芸術団体の公演などを開催し、北東アジア地域の特色を強調することを旨に、ミュージカル公演、特色飲食など各国の特色と情緒、多種多様な文化交流活動づくりに取り組み、人的な交流と経済協力を資するところがある。

第四、北東アジア地域協力開発の良い環境を生かし、政府文化管轄部門、政府調整部門、各

種業界商会協会のインフォメーションセンターの設立を積極的に推し進め、政府の政策指導、調整及び業界商会協会の専門的な管理を通じ、北東アジア地域の一連の文化産業協力協議の合意を積極的に推進する。類似性のある地縁関係と文化背景を生かし、合理的な計画を行なったうえ、合理的に地域文化資源を開発し、北東アジア地域関係諸国間の文化観光開発、協力及び発展を促進させる。

参考文献

- ①崔向東. 遼西古回廊与古代文明交流 [J]. 廣西民族大学学報 (哲学社会科学版), 2014(3): 138-143.
- ②張滿林, 趙恒德. 遼西回廊地域観光發展研究 [M]. 北京: 知識產權出版社, 2013(1): 1-7.
- ③付金純, 紀思. 遼西回廊史話 [M]. 瀋陽: 春風文芸出版社, 1994(12): 70-71.
- ④呂俊芳. 挖掘区域文化優勢整体打造遼西六色觀光之構想 [J]. 渤海大学学报 (哲学社会科学版), 2012(2): 42-44.
- ⑤賴斌. 旅遊顏色与顏色化旅遊 [J]. 社会科学家, 2011(5): 68-70.
- ⑥呂俊芳, 李悅錚. 錦州湾三色旅遊發展研究 [J]. 海洋開發与管理, 2012(9): 129-132.
- ⑦呂俊芳. 旅遊规划理論与实践 [M]. 北京: 知識產權出版社, 2013(1): 257-266.
- ⑧温士賢. 市場經濟与怒族社会生計轉型 [J]. 廣西民族大学学報 (哲学社会科学版), 2014(1): 94-100.
- ⑨李剛. 東北亞区域旅遊一体化協作發展機制研究 [M]. 天津: 南開大学出版社, 2014(8): 99-105.
- ⑩李剛. 東北亞区域旅遊一体化協作發展機制研究 [M]. 天津: 南開大学出版社, 2014(8): 200-206.